The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	意匠学会第45回大会報告
Author(s)	横川, 公子
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 119-126
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53231
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

意匠学会第45回大会報告

横　川　公　子

第45回大会は，武庫川女子大学が当番校となり以下の日程とプログラムで開催された。

期　日　　平成15年11月14日（金）～16日（日）
場　所　　武庫川女子大学　生活環境学部プレゼンテーションルーム
　　日下記念マルチメディア館

11月14日（金）　9：30　受付開始

プレイベント

会　場：武庫川女子大学生活環境学部プレゼンテーションルーム（H３－２F）

研究発表（発表時間30分　質疑応答10分）

午前の部　9：50～11：50　司会：山本　一貴（神戸大学大学院）

① 9：50　マドレーヌ・ヴィオネの衣服観 ── ドレープ表現を中心として ──
笹崎綾乃（神戸芸術工科大学大学院芸術工学研究科総合デザイン専攻）

② 10：30　映画『流れる』に見る服飾表現　吉田　拓（京都造形芸術大学博士課程）

③ 11：10　建物更新にみる建物と店舗・建物と町との間合いについて
── 大阪市西区堀江を事例に ──
大谷光一（武庫川女子大学大学院後期課程）

11：50（昼食休憩）

午後の部　12：40～16：10　司会：金刺　礼子（神戸大学大学院）

④ 12：40　カルロ・スカルパの建築を作るもの ── プリオン家墓地を通して ──
城崎有紗（大阪大学大学院文学研究科修士課程）

⑤ 13：20　対外宣伝のデザイン戦略 ── 1930年代日本の観光誘致について ──
山田優子（同志社大学大学院博士前期課程）

⑥ 14：00　「富本憲吉模様集」（1923，1926，1927）にみる図案家としての富本憲吉
大長智広（京都市立芸術大学博士後期課程）

14：40（休憩）

⑦　14：50　視覚文化へのコンピュータの影響を探るために
—— レフ・マノヴィッチ『The Engineering of Vision from Constructivism to Computers』から ——
水野勝仁（名古屋大学大学院博士前期課程）

⑧　15：30　初等情報教育におけるウェブサイト制作実習の教材試作
内藤美千絵（名古屋大学大学院博士前期課程）

交流パーティー　17：00〜19：00（於　同プレゼンテーションルーム）

11月15日（土）

第45回意匠学会大会

会　場：武庫川女子大学日下記念マルチメディア館（1Fホール）

受付開始　9：30

開　　会　10：20

研究発表（発表時間30分　質疑応答10分）

10：30〜12：00　【座長】梅宮弘光

①　10：30　京都の町家におけるコミュニケーション —— 招かれざる客 ——
丹羽結花（京都工芸繊維大学）

②　11：10　オランダの近代建築と日本
—— 大正から昭和初期における建築文化交流について ——
奥　佳弥（大阪芸術大学）

11：50（昼食休憩）（委員会）

総　　会　13：00

研究発表

14：00〜15：20　【座長】藤田治彦

③ 14：00　雑体書の文字意匠の特色について

――『篆隷文体』と『篆大学』を例に――

全　容範（京都工芸繊維大学）

④ 14：40　デジタルアーカイブの現状　辰巳明久（京都市立芸術大学）

15：20（休憩）

15：30～16：50　【座長】足立裕司

⑤ 15：30　法隆寺金堂・山中羅漢壁画の復元に関する研究

―― 堂内空間と壁画で奏でるトータルコーディネイト的な魅力を探る ――

松田真平（㈱ICD 現代デザイン研究所）

⑥ 16：10　中国陶磁における詩文装飾について　伊東徹夫（京都市立芸術大学）

懇 親 会（公江記念講堂　第２会議室）17：00～19：00

11月16日（日）９：30　受付開始

研究発表（研究発表30分　質疑応答10分）

10：00～12：00　【座長】並木誠士

⑦ 10：00　教材研究としてのマドレーヌ・ヴィオネ――ハンカチーフ・ドレス1920

鈴木桜子（杉野服飾大学）

⑧ 10：40　明治後半から大正初期の高島屋における竹内栖鳳の立場

廣田　孝（京都女子大学）

⑨ 11：20　琳派と雪佳　榊原吉郎（京都市美術館）

12：00（昼食休憩）

パネル発表　13：00～14：30

① 脳内視覚研究

赤阪季与子（大阪芸術大学　大学院　芸術文化研究科　博士後期課程）

② 『主婦之友』にみる大正期の子供服について

岡林　裕子（大谷女子短期大学　生活文化学科）

③ Cafe Brize＋N社本社事務所　川島　洋一（福井工業大学工学部　建設工学科）

④　見えないものを見る……カミ空間の予感　　北辻　稔（㈶大阪都市協会）

⑤　ヒューマンボディデザインの実験

滝口洋子（京都市立芸術大学　ビジュアルデザイン研究室）

⑥　センテナリオ　402　　谷本尚子（精華大学　他　非常勤講師）

⑦　Mode de Papier II ── Coupe ──　　原田純子（神戸文化短期大学　服飾学科）

⑧　法隆寺金堂壁画・山中羅漢図（一号大壁上）復元イメージ（実寸）

松田真平（㈱ICD 現代デザイン研究所）

⑨　『二十二夜待ち』舞台衣裳デザインコンセプト

森田雅子（武庫川女子大学　生活環境学科）

14：30（休憩）

シンポジウム　14：40～16：40　司会：横川　公子

「戦後50年間の服飾文化および服飾デザインに関する概説書

── 服飾文化学および服飾デザイン教育の見直しのために ──」（別に資料集配布）

パネラー：青木美保子（京都工繊大院）井上雅人（京都造形芸術大）森　理恵（京府大）

平光睦子（大阪大院）

閉　　会　16：40

以上

昨年の第44回大会に引き続き，今大会においても意匠学会および当番校の共催でプレイベントとして研究報告セッション・研究発表・パネル発表・シンポジウムが企画・開催された。

プレイベントは，昨年の研究発表者である大学院生による自主運営を旨とし，近隣の神戸大学大学院の協力の下に，とどこおりなく行われた。昨年同様，関西を中心とするデザイン・意匠学系の各大学院に，今年は中部地区から名古屋大学大学院の参加を得て，合計８つの研究発表が行われた。各発表はよく準備され，研究者の初心に触れるさわやかなもので，若手研究者の積極的な交流の場となった。

大会第１日目午前から第２日目午前にかけて，計９つの研究発表がおこなわれた（本号掲載の発表要旨参照）。内容は，焼き物や染織，衣裳，建築，地域デザイン，広告，作家研究やコンピュータの視覚デザインへの影響，ウェブサイト製作に関するデザイン実践やデザイン関連のデジタル・アーカイブの現状など，古代から現代までの内外にわたる多様なデザイン活動が幅広く取り上げられた。

総会では，例年のように議事が進行し，委員会の原案がすべて承認された。さらに宮島久雄会長の挨拶の後，第2回意匠学会賞の受賞者の発表と授与がおこなわれた。同時に学会の活性化につなげる上で，受賞対象として作品の選出に視野を拡大することが課題として言及された。

懇親会は，第1日目の夕方，大学構内の公江記念講堂地下の会議室で行われた。学会賞受賞者や口頭発表者，パネル発表者を含めて多彩な話題が展開し，次回の大会への抱負も膨らんでいたようにおもわれる。学生会員も含め，思いがけず多数の出席を得て，盛会裏に会を終えることができた。

第2日目午後には，パネル展示部門の発表と討論が企画され，計9点が提案された（本号掲載の要旨参照)。発表の意図および内容の報告とそれに対する質疑・討論が適切におこなわれ，充実した企画になったという印象である。今後は，さらに意欲的な作品展示が期待される。

大会最後に開催されたシンポジウム「戦後50年の服飾文化および服飾デザインに関する概説書 ── 服飾文化学および服飾デザイン教育の見直しのために ──」は，例年通り大会開催校の意図に沿って企画された。本テーマには，かつて意匠学会で多くを占めていた服飾関係の報告が，最近は減少しているという状況に照らして，その現況を捉え直そうという意図があった。また周知のように服飾に関する研究や教育は，主に女子大学で取り組まれてきたということで，女子大学において開催する本大会を特色付けるものにするという理由もあげることができる。但し大会最後の本企画への参加者は50人くらいで多くはなく，内容も各報告者の報告に終始して時間切れになったことは，主催者側の企画倒れの観を免れない。但し報告者は，当分野の若手や中堅の研究者であり，3ケ月前よりシンポジウム開催に向けて調査を積み重ね，その成果がシンポジウム資料としてブックレットにまとめられた。これが当日の資料として参加者に配布されたことで，多少でもシンポジウムの欠陥をカバーすることができたのではないかと考えている。

報告者はそれぞれ，この資料集を拠りどころとして提案したため，以下では，主にこのシンポジウム資料集の内容を紹介しておきたい。

服飾文化および服飾デザイン分野の研究と教育の見直しのためには，研究の実際を展望することが正攻法のようにおもわれる。が，この分野に関する知識や内容が広く普及し，多くの初心者や読者に受容されるのは，概説書であることに注目して，戦後約50年にわたって刊行された当該分野の概説書が取り上げられた。実際には上記の報告者即調査担当者で概説書100点を絞り込み，その内容の特徴が検討された。

服飾に関する文化学的検討は，服装史，服飾美学，服飾社会学，服飾意匠学，被服心理学といった領域が知られている。衣服のデザインに関する内容は，衣服の制作原理や手法，デザイ

ン等の内容を含み，被服構成学，服飾デザインなどの領域名称がある。これらの内容は，意匠学会が内包するデザインの実践から美学・美術史までの領域に対応している。シンポジウムのパネラーで同時に調査担当者の専門と関心にしたがって，各視座から概説書の内容の特徴と課題が提案された。

まず森理恵さんは，「日本服装史の推移と展開」において上流階級に注目する有職故実の立場や日本独自の伝統を求める視線のあることを指摘し，それ故に日本服装史が現代までほぼ一貫して天皇制擁護や天皇を中心とした国民国家の形成や単一民族国家の神話を拠りどころとしてきたことを指摘した。そうした内容が保持されてきた原因の一つに，当該分野の主な担当者が歴史学や風俗史，美学美術史の研究者であることに求められるのではないかとする。そのため，服装史が，彼らの専門分野の周縁の課題として位置づけられてきたというのである。しかし服装が，文化の多様性を如実に反映する独自の仕掛けであることに注目すれば，服装史は，服装についてのあらゆる面の知見－被服材料や被服構成などの－を活用して，歴史学や美術史の亜流としての服装史から抜け出す必要があるという。そのうえで服装史を再構築する切実な課題は，多様な時空間のなかで，ひとが自分を社会に差し出すための服装を見定め，自分の装いを取り戻すことにあるのだとする。

井上雅人さんは，「社会学とファッション」という題目で，社会学的視点から取り上げられてきた衣服の側面を取り上げた。社会学的な視点の最も大きな特色は，衣服を作るものとしてではなく「買って着る対象」とし，ファッションとして捉えるところにあるという。それらの多くは，被服学が反映しない流行の伝搬論である。社会学の視座ではさらに，作家論や産業論，とくに産業面を重視した社会システム論に関心が高い。文化史的な視点も無視しがたく，柳田国男の民俗学的な取り組みもこれに重なるとする。社会学で「ファッション」という言葉が使われる背景には，衣服に社会集団の軌跡を見ようとする視座があることは自明である。だとすれば，何も衣服を見なくともよいことになる。ファッションをタイトルに付けた本が増えだしたのは1970年代以降で，その後この傾向は加速している。そして，この動向は，衣服が実際の生活の中で作るものから買って着るものに移行した時期に重なる。社会学が注目したのは，この買って着られる衣服なのだ。そこで課題となるのは，ファッションの社会学が衣服を見なければわからないことは何なのか。その基底にある「作る対象としての衣服」とは何だったのかを改めて問うことだと提案される。

青木美保子さんは，「被服学におけるデザイン領域の所在 ── 自立までの軌跡 ──」と題して，「きものを作って着る」という衣服のデザイン領域が，「服飾美学」や「被服構成学」の領域の中から相互に関連しながら独自の領域として認識されるようになった経緯を提案した。概説書によれば，戦前から戦後にかけて，宮下孝夫・山崎勝弘といった高等工芸学校の出身でド

イツのデザイン運動を受容しながら日本での工芸デザインの実践を先導した人々が，まず「被服デザイン」や「被服美学」を掲げたのに始まる。その後，被服構成領域の自然科学的な展開によって，この分野の矮小化が進行した。が，1980年代に既製服が衣服の主流となるに及んで，産業生産における衣服造形の指針となる原理を確立する必要が生じ，それが被服のデザイン領域の重要性と独自性を再確認させることになったと整理される。その意味でデザイン領域は，未来的な課題だとする展望が示唆された。

平光睦子さんは，衣生活において常に「美」や「美しさ」が課題とされてきたことを拠り所として，概説書に顕れた「衣服美」「着装美」などの衣服の美に関連する用語に注目して「被服学・被服教育における服飾美学の展開」を捉えた。戦後すぐの頃の被服学の教科書では，衣生活における美しく装うことへの関心は表面的で二次的なこととされ，科学的・合理的な考察へ導こうとする傾向があること。具体的には，服装の美しさが素材や色，形などのリズム・プロポーション・バランスといった造形原理として捉えられた。さらに機能美や実用美といった着る行為によって自覚される美，他者の視線によって形成される装いの美が注目される。その後1990年前後から，服飾の美学的検討は，衣服の本質論として他の文化的諸領域との関係から捉えようとする服飾文化学へと展開する傾向が見られること。それに伴って服飾の美学から服飾表現へと問いかけが変容していること。さらにこの領域が，主に美術家やデザイナー，美学・美術史の研究者の関与によるものであることが指摘された。服飾の美学的検討は服飾の本質論に向かうものであり，総合的な服飾文化の集約に向かうことが指摘された。

松本由香さんは，裁縫中心であった戦後まもなくの被服教育を，生活の変化に対応させようとして発展してきた領域として，「民族（民俗）服飾分野と被服心理学分野」の展開と推移を跡付けた。民族（民俗）服飾は，服装史と被服構成学の一部として，衣服と生活との関係に注目する視座から取り上げられるようになるが，戦前には柳田国男，瀬川清子，江馬三枝子らにより，戦後は高橋春子や徳永幾久，日浅治枝子により主に労働着が取り上げられ，田中千代や松本敏子が世界各地の民族服飾を取り上げた。が，その取り組みは多くはない。大抵はものを中心としたアプローチで，衣服の形態や構成，染織および製作技法，文様，素材の時間的推移や地域的な分布と伝搬の解明が中心的課題とされてきた。最近では，流行や着装行動などの社会学的な視点が盛り込まれるようになった。被服心理学は，アメリカの被服研究の動向を反映したもので，消費・購買行動，着装行動に見る衣服の社会・心理的働きについて考察してきた。この分野の概説書は，1980年～1990年代にかけて出版され，作る衣服を対象とする被服構成学に替わって，新しい分野として注目されるようになったとする。

概説書を通して見る服飾に関する文化的検討とデザインを巡る知的状況は，被服学の内発的な必然性によるのではなく，多くは外発的な要請によることが指摘された。戦後50年の間に

大きく変化した衣服製作の産業化や日常生活の欧米化など，外発的契機によって当該分野の出版が促されてきたのである。概説書が取り上げる対象についても，1980年代ころから「作る衣服」から「買って（選んで）着る衣服」へと大きく変化があらわれる。また当該分野の担当者・著者の多くは，被服学で教育された自前の研究者ではなく，歴史学や美学の研究者，デザイナーなどの専門家であり，かれらによってその専門領域の周縁の領域として取り上げられてきたことが指摘され，そのことが当該分野を方向づけてきたのではないかと指摘された。

したがって，衣服自体から見えてくる課題や，衣服関連の広範な知識を活用して独自の検討をすること，「着る」ことの土台にある「作る」対象としての衣服が促した文化的課題に改めて注目することなどが，必然的な課題として指摘されたといえよう。また外発的な状況に対応するばかりでなく，それらを相対化し，衣服という事象の意味や価値づけについて再構築することが，改めて課題として示唆されたといえるのではなかろうか。